東南アジアブックス

シンガポール作家協会　編

シンガポール華文小説選（下）

福永平和・陳　俊勲　訳

井村文化事業社　発行
勁草書房　発売

シンガポール作家協会　編

シンガポール華文小説選（下）

福永平和
陳　俊　勲　訳

井村文化事業社

訳者紹介

福永平和（ふくなが・へいわ）

1946年　東京生れ
1968年　早稲田大学政経学部卒業
毎日新聞社入社。大阪社会部，鳥取支局を経て1973年から東京社会部。共訳書として「シンガポール華文小説選（上）」（井村文化事業社），「残夜行」（めこん），「日本に何を学ぶのか」（勁草書房），「日本軍占領下のシンガポール」（青木書店）がある。

陳　俊勲（本名・朝元照雄）

1950年　台湾生れ
1978年　亜細亜大学経済学部卒業
1980年　筑波大学地域研究科修士課程修了
同大学社会科学研究科経済学博士課程修了
日立製作所国分工場嘱託
共訳書として「シンガポール華文小説選（上）」（井村文化事業社），「残夜行」（めこん）がある。

東南アジアブックス　102
シンガポールの文学　2

シンガポール華文小説選（下）

1990年2月20日　第1刷発行

訳者　福永平和
陳　俊勲

発行所　株式会社　井村文化事業社
東京都渋谷区道玄坂 2-16-3 電話03-496-1306

発売元　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽 2-23-15　電話03-814-6861
振替　東京　5-175253

＊落丁・乱丁本はお取替えします。
＊定価は表紙に表示してあります。
＊無断で本書の一部または全部の複写・複製を禁じます。
©福永平和
陳　俊勲

製版／清水印刷　印刷／根田印刷　製本／和田製本

ISBN4-326-91103-4

発刊に当たって

王　鼎昌（ワン　ティンチャン）

アジアにおいて、現代文学の強化、発展には、新聞が大きな役割を演じてきた。著名な作家や新作家の作品など、数多くの文芸作品は、いずれも新聞の文芸特集面を通じて読者と接する機会を得たのである。こうした定期あるいは不定期の新聞の文芸特集面は、作家のために発表の場所を、読者に対しても文芸作品と触れ合う機会を提供してきた。新聞の大きな推進力と鼓舞、激励がなければ、恐らく、多くの人材が埋もれ、多くの文学作品が日の目を見なかっただろう。

こうした文学発展の伝統に基づき、我が国の主要な華文の新聞は、創刊以来、この地の作家に発表の場所を提供し、読者に文芸作品を紹介してきた。華文の新聞は、作家にとって、目に見えない精神的激励と、ある程度の物質的支えを与え、健康的な文芸作品の発表を通じて、多くの読者に対し精神教育の効果を発揮し、それによって我が国の文教事業に消えることのない貢献をしたのである。

南洋商報は、「建国文学」を推進しようという呼びかけに応え、独立十七周年を記念して、シンガポール作家協会との協力によって「吾土吾民」文芸選集を編集出版した。これは、まさに上述した華文新聞の伝統精神の具体的な表れである。

この文芸選集は、我が国の一九六五年の独立以来、各紙に掲載された作品が含まれており、我が国の進歩と国民の生活の変化を描いた作品の中から精選されたものである。読者は、我が国国民の国家意識の成長ぶりと、建国の努力と経済の進展を作品の中に見出すことができるだろう。また、選集は我が国が、建国段階で提唱している精神文化や建設の努力に対する積極的意義を持つものでもある。

私は、この文芸選集の出版が、我が国華文文学の発展の一つの里程標になるものと深く信じる。この素晴らしい始まりは、真面目で厳粛な国家意識と社会的責任感をもった我が国の作家に対し、必ずや一定の激励作用を発揮することだろう。

最後に、私は、南洋商報及びシンガポール作家協会が、この本を出版するために払った努力に対し、賞賛を表したいと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

編者まえがき

黄孟文（ホワンモンウェン）、鐘文苓（チョンウェンリン）

我が国の交通大臣兼労働大臣（前文化大臣）である王鼎昌氏は、今年、初めて「建国文学」のスローガンを提起し、文化界の人々や文化団体の熱烈な共感を得た。みな、同じ考え方である。シンガポールが一九六五年に独立して以後、物質文化の建設では、大きな成果を得、各国（とりわけ発展途上国）羨望の的になっている。しかし、精神文化の面では、逆に、一歩踏み込んだ強化策が待たれる現状である。今日、我が国の工商業の発展、社会の安定は繁栄の一途をたどっている。有識者はみな、今こそ、精神文化の領域に「進軍」すべき時期だと認めている。このため、王大臣の上述の呼びかけは、時宜にかなっているだけでなく、意義深いものでもある。

南洋商報とシンガポール作家協会は、協議を重ねた結果、実際行動で、王大臣が展開した「建国文学」運動の呼びかけに応えることを決定した。それは両者が協力しての「吾土吾民創作選」の出版計画である。この選集を通じ、我が国の独立以来の華文文学（とりわけ建国に関わる華文文学）作品に対し、さらに認識を深め、ひいては、この基礎の上に立って、「建国文学」を一つの高峰に押し上げていただくことを希望する。

「建国文学」の定義は、非常に広い。およそ我が国の進歩と国民の生活の移り変わりを描いた作品は、すべて考慮すべき対象となる。こうした作品は、主に我が国国民の国家意識の成長と建国の努力を反映したものである。さらに、積極的な面であれ消極的な面であれ、各階層の人々の物質、精神生活のバランスや矛盾は、すべて作家が作品の中で、時代の姿や基本精神、共通の属性として反映させたものであり、その意味で積極的な意義を持つのである。

南洋商報とシンガポール作家協会は、特別なプロジェクトチームを発足させ、選集発刊を処理した。メンバーは、鐘文苓をチーフに、黄孟文、王潤華、張道昉、張揮、陳徳復、李過、杜南発と長風葛である。チームは、いくつかの小グループに分かれ、各種の文学ジャンルの編集作業について責任を分担した。

「吾土吾民創作選」は、計六冊で、小説が二冊、詩歌、散文、戯曲と詞「我らの歌」が各一冊ずつである。このうち、詞曲は、国家劇場作曲学会とシンガポール作家協会が共同で出版した。二つの団体は、一九七九年以来、何回も共同作業を続け、六十以上の地元色の濃い歌曲を創作し、それを「我らの歌」と題し、まとめていた。現在、編集グループは、その中から三十首を精選し、「吾土吾民創作選」の中に加え、この選集を一層完璧なものにした。

我々は、この選集が、我が国の将来の文学の発展にとって、多かれ少なかれ、啓発と感化の作用を生み出すものと思っている。もし、我が国の作家が、今後、この文学の伝統をさらに発展させ、より多くの、より素晴らしい作品を書いてくれれば、この作品集を編集したことは、一層、意義あるもの

になるだろう。

一九八二年　八月

目次

発刊にあたって……王鼎昌……i
編者まえがき……黄　孟文、鐘　文苓……iii
歩合外務員……尤　琴……1
余夫人の計画……青青草……46
善行……丁之屏……60
果てしなき雲……黄孟文……84
老人とサンジー……懐　鷹……141
上と下……岳　典……151
チャンピオン……潘正鐳……156
旅情……孟　紫……176

堅い根……范北羚……205
明月を想う時……陳華淑……216
七色のカメレオン……田流……238
老人のいる家……呉登……253
王座長の明日……易梵……271
長い廊下……何耀明……287
著者紹介　300
訳者あとがき　304

歩合外務員

尤琴

９５０、９４８、９４６、９４２……数字が連続して低い方に滑り落ちて行く。心臓が、数字の下落に従ってグッーと縮み、締めつけられるように痛んだ。息苦しさから、目を閉じた。びくつくような数字は見てられない。だが、数字は止まるところを知らず、目の前で跳びはね、揺れ動いている。８８０、８７４、８６８……ダ、ダメだ！　もう、たくさんだ！　止まってくれ！　かすれ声で叫んだ。突然、足元がファーッとした感じになって、体の自由がきかなくなり、崩れ落ちた。耳元では、ヒュー、ヒューと風の音が聞こえるだけ。深い、寒々とした底の見えない洞窟に落ちていく気がした。両手を上げてもがいた。ああ……助けてくれ……どこへ落ちていくんだ？　何が体の上に乗っかかっているんだ？……とても重い。重くて窒息しそうだった。訳がわからず、つかんでみた。うっ、株券だ！　自分の株だ。売ってしまうわけにもいかない。売れば元を割ってしまう……どうして、こんなにたくさんの紙切れが一枚、また一枚とヒラヒラ落ちてきたんだ。重くて呼吸できない。だめだ！　息をしなくちゃ。そうしなきゃ、死んでしまう。リリリーン……ふいに、周りからカン高い音が響い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て来た。何の音だ？　助けに来てくれたのか？……

何が何やらわからないまま、あえぐように意識を取り戻して目を開けた。気が抜けたように周囲を観察した。床まで届くダークブルーのカーテンが、窓の光を遮っていて、室内はまだ暗かった。ただ、部屋の隅の閉めていない窓のカーテンだけが風に吹かれてさざ波のようにパタパタと揺れ動き、そこから、おぼろげな光線が漏れていた。意識の中の、あの鋭い音が枕元から響いてきた。混沌の縁から脱して、頭がはっきりし始めた。体を傾け、手を伸ばして探った。やっと目覚まし時計を押さえた。ベルの音はやんだ。七時を指している短針をぼんやりと見ていた。

しばらく天井を凝視していた。心臓は、まだ動悸を残していて、ついさっきの夢の世界を思い起こした。ああいった数字は知りつくしたものだ。まだ、心の中の陰影を振り切る術は思い浮かばなかった。妻と一緒にあらゆる蓄えを株式市場に注ぎ込んだところ、その後は気違いじみた暴落を続け、一万ドルの元手が一気に一千ドルになってしまった。それは一九七三年の大暴落[1]の時のことだった。損害は破滅的で、身代をなくすまでは至らなかったが、辛苦の末に蓄えた金を使い切ってしまった。しきりに胸を叩いてくやしがり、妻はただ泣くばかりだった。できることは、待つことだけで、値が戻るよう祈った。五年待てば大丈夫だろう。五年たち、さらにもう少し。元手はまだ戻っていない。引き出しの底には、今年もうまく売れなかった株券が詰まっている。

朦朧となり、目をまた閉じた。すぐ、何か物音を聞いた気がした。精神を集中して聞き耳を立てると、窓の外でザァザァという音がしていた。

「雨が降ってきたのか。畜生め！」。チェッと舌打ちした。耳をそばだて、雨の音を確かめると、フーッと溜め息をついた。「畜生、一日中雨だ。網にかかる魚はまた出てきやしない。多分、今朝の市場もまた、物音なしか」。眉間に皺を寄せ、寝返りを打ち、もう少し寝ようと思った。

隣の部屋から娘の泣き声が伝わってきた。ちょっと頭にきたが、しばらく静かに待ってみた。だが、泣き止まなかった。しぶしぶ布団カバーをめくって、寝惚け眼をこすり、ゆっくりと隣の部屋へ行った。

まだ、生後数ヵ月しかたっていないのに、なんてボリュームたっぷりの泣き方だろう。撫でたり、あやしたりした。「ああ……おとなしくしな。美美（メイメイ）や、泣くんじゃない。パパは、お前が可愛いんだ。泣くんじゃない。おしっこしたのか、それともお腹がすいたの……」。言いながら、掛けてあるタオルを広げてオシメを調べた。

ミルク瓶を持った老婦人が、ゆっくり身体を揺すりながら入ってきた。いとおしそうな目を孫の体に投げかけ、「きっと、お腹がすいたんだね。ミルクですよ。ミルクですよ」とあやした。老婦人は、子供のオシメを替えながら、振り返って穏やかに言った。「阿賀之（アーフージー）[2]、何でこんなに早く起きたのかい？　ゆっくり眠れなかったの？」

杜（トゥ）賀之は、あいまいな返事をし、母親が体を曲げて、女の子を抱き起こすのを見ていた。視線は自然に母親のバサバサな白髪に注がれた。同時に、別の考えがパッと閃いた。

メイドを探さなくちゃならない。母親の仕事を軽くしてやらなけりゃ。六、七十歳になった年寄り

にとって、忙しいのはとても辛いことだ。

退屈そうに窓際まで歩いて行き、カーテンを開けてちょっと外を見てみた。家の周りの建物は、みな、けぶったように見えた。細い雨がしきりに降っていて、通行人は傘を広げ、学校の生徒達はレインコートを着て、慌ただしく道を急いでいた。

また、溜め息をつくと、リビングルームの中をゆっくり回り、やっと坐って新聞を広げた。

大きな見出しにざっと目を通した後、経済面をめくった。まず見たのは株価グラフだった。図表には指数の下落が記されていた。側に注釈がある。華僑銀行指数(3)は、２３３・０５。少し、しかめっ面をし、何か考え事があるかのように、図表と指数をじっと見つめ、それから新聞を置いた。言い表すことのできないような苛立たしさに襲われた。

物憂そうに立ち上がり、ゆっくりと台所に向かった。

台所には、すべて現代化された設備が揃っていた。窓際の洗濯機、ガスコンロ、換気扇、電気冷蔵庫はみんなピカピカに磨かれていた。ずらっと並んだ戸棚もきれいに磨き上げられ、上にはトースター、ミキサー、電子レンジが置かれていた。このきちんと清潔に保たれている台所に入って、眉の間もいくらか広がった。ちょっと間を置いて、満足気な顔になり、じっと見ていた。内心、妻の苦労を誉めたたえた。

顔を洗い終えると、八歳の長女と五歳になる長男が起きてきた。「パパ、お早う」。二人一緒に叫んだ。

「ウン」。ゆっくり答えた。「早く、顔を洗っておいで。そうしたら朝御飯だよ」

二人の子供は、キャッキャッと笑いながら、争うように台所にかけて行った。

男の子は幼稚園に通い、長女は小学校の二年生。4DKの毎月のローンは数百ドル。一ヵ月の出費は驚くべきものだ。よりによって、この数ヵ月、株式市場はまた停滞し、一向に上がらない。一ヵ月に四、五百ドル持ち帰っても、生活費に充分という訳にはいかない。妻は小学校の教員で、六、七百ドルの月給を一緒にして賄う。それでも貯金する術はないのである。

さらに、車を維持する金が必要だった。聞くところでは、また、道路税が上がるという。こうしたことを考えると、頭が痛くなる。パンを持って、ベタベタとバターを塗りたくり、あわてて口に放り込んだ。もう一方の手で、妻が出勤する前にちゃんと作っておいてくれたコーヒーを注いだ。

妻に感謝しない訳にはいかない。朝早く、朝食をきちんと作ってから学校に出勤し、午後、家に戻ってまた忙しく家事をこなす。さらに、三人の子供の世話もしなければならない。夜はまた、暇をひねり出して家庭教師をしなければならない。賀之本入も毎晩アルバイトをしている。そうやって、二人合わせて月千五、六百ドルの収入になるのである。必死になって一家六人の生活を維持しているのだ。本当に難しいことなのだ。でも、妻は良妻賢母で、母親も調子を合わせ、嫁姑は一緒に和気あいあいと暮らしていた。それが、一番心休まることだった。

もっとも、心配なのは、収入が不安定ということだった。株式市場が良い時は、一ヵ月の収入が千ドル以上ということもよくある。こともあろうに、最近の市場は奮い立たず、動かない。うろたえる

ばかりだ。どうすれば、収入が増えるかといつも考えていた。どうやって、この差し迫った苦境を打開すれば良いのだろう？

銀行の事務員の仕事を投げ出したことを後悔すべきなのだろうか？　月給は九百ドルもあった。一九七三年頃、株式市場は驚異的に値上がりし、見る見るうちに、歩合外務員をやっていた同窓の奴の収入は何と自分の二倍以上になった。妬まず、羨まずとはいかなくなった。証券会社で働いて、金儲けをしていた奴はかなり多かった。そこで転職の考えが頭をもたげたのだった。

折しもその頃、上司とちょっとした意見の違いがあって、お互い気まずくなっていた。そこで、決心して銀行を辞め、証券会社に飛び込んだのだ。初めの数ヵ月、過去の大学時代の教授や同級生に寄りかかり、口座を数多く増やした。収入は意外と多く、家も、車も手に入れた。だが、結構な状態は、はかない夢で終わった。数ヵ月後、国際情勢は大きく変わった。石油禁輸が始まったのだ。景気は悪くなり、影響の及ぶところ、株式市場は大暴落となった。

その時から、賀之はアルバイトを始め、妻も家庭教師をするようになった。

目の前の朝食を押しのけて立ち上がり、ベッドルームへ歩いて行った。部屋の明かりを点けた。妻が用意しておいてくれたライトブルーの格子縞のシャツを着て、鏡に向かって髪をとかし始めた。半分いったところで、急に動きを止めた。ぼんやりと鏡の中の自分を見つめていた。痩せた顔つき。高い頬骨。大きな目。だが、目に精気のかけらもない。濃い頭髪の中に二、三本の白髪が出ていた。首を振りながらボソボソと独りごちた。「まだ三十七、八歳というのに、もう老けてしまった……」。苦

笑いした。

証券会社のぶ厚いドアを押し開くと、冷気が真正面から襲ってきた。肩をすくめて、冷気を深く吸い込んだ。廊下を歩いていった。壁に沿ってズラッと並べてある椅子には、誰の姿もなかった。しきりと首をかしげ、ドアを開けて事務室に入った。横をざっと見渡すと、ガラスで隔てられたロビーには、老人が何人か立っていた。二、三人の中年女性が高い椅子に坐って雑談に興じている。人を探すような目付きで、ロビーをサッと見遣り、馴染みの顧客がいないのを知って、やっと安心したのだった。

自分の席に戻って坐り、書類カバンを開け、束になった書類を取り出して仔細に調べた。ある顧客の現物買いの支払いが二週間も遅れ、まだ株を受け取っていないことがわかった。幸いなことに少額の取引だった。そうでなければ、あの客がこんなに遅れることはない。客に念を押すため、電話をかけようと思ったが、もう一度考えてみた。あの客は教員だから、多分、今頃は学校へ行ってるだろう。今晩にしよう。いずれにしても、必ず連絡をつけなくちゃ。

また、記録簿をひっくり返して詳細にチェックし始めた。まだ、誰か清算の済んでいない客がいないかどうか。まだいた。今月は「万能企業」と「ファーサーニー」で、中期の利益配当が発生していた。顧客の中で、この二社の株を買ったのがいるかどうか。いれば、登記に来るよう通知しなければならない。でなければ締切日を過ぎてしまい、顧客はきっと文句を言うに決まってる。

隣に坐っている陳さんが、ふいに肘を曲げてつついた。声をひそめ神秘的な雰囲気を作って言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com